

# IASB 新旧理事のご挨拶

- IASB 理事就任にあたって 21  
IASB 理事 すずき りか  
鈴木 理加
- 世界を変える ASBJ マジック 23  
(前) IASB 理事 おうち たかつぐ  
鶯地 隆継

# IASB 理事就任 にあたって

IASB 理事 **すずき りか**  
**鈴木 理加**



国際会計基準審議会（IASB）理事として2019年7月1日に就任した。質の高い国際財務報告基準（IFRS）の開発や修正と、一貫した適用を支援していくというIASBとしての目的を実現するために、世界各国から異なるキャリアを持って集まる個性豊かな他の理事と共に、重責を担っていくこととなる。

## 新たな職務に係る責任と判断

IASBのロンドンオフィスで過ごす日々の中で、ある時から急に、ポール・ゴーギャンの描いた「我々はどこから来たのか、我々は何者か、我々はどこへ行くのか」という長い作品名と昔見た絵画の様子が、頭に浮かんで離れない。この絵画は、ボストン美術館に所蔵されており、人生の始まりから、活動が活発な成年期を経て、人生の終わりまでの人間の姿を青みの強い背景に沈むことなく南国の人々の日常生活として描いた作品である。これまで公認会計士として会計監査を中心とした道から飛び出して、新たな職務と責任に向き合って歩み出したことから、この絵画を思い出したのであろうか。

前職では、PwC あらた有限責任監査法人のパートナーとして、企業会計基準委員会（ASBJ）の専門委員会の専門委員として、また、PwCのグローバルネットワークのIFRS

専門部隊で日本を代表するパートナーとして、日本の会計や監査の実務を踏まえて、自分の意見や見解を示してきた。そうした立場において、問題の全容をつかんだ上で、会計基準の原則をあてはめながら、実務的な配慮をどこまでできるのかといった困難な検討に、何度も直面してきた。そのようなとき、自分の属性から解き放たれるということは、ほとんどなかった。むしろ、常に自分がどの属性にあるのかを忘れることはなく、自らの軸と秤を使いながら判断していた。

しかしながら、困難な問題の検討や判断において、現職で期待されている理事としてのあり方は、前職で求められていたあり方とは、明らかに異なる。もちろん、日本の公認会計士として身につけてきた知識や経験は貴重なもので私を支えており、前職での役割や責任がなければ、今の私という存在がない。また、現職に着任することもなかったであろう。そして、今の私が持てる知見の全てを投じて、職務を果たしていくことも期待されている。ただし、私自身であること自体を変えることなく、かつ、多様な関係者からのインプットを聴き理解し、そのときに持ち得たもの全てを踏まえて、最終的には、独立した存在として判断してアウトプットしていくことが求められている。すなわち、私自身の属性から繋がる知見やインプットを踏ま

えながらも、その属性をも切り離れた独立した存在として物事を判断していくことの難しさは、これまでの人生の中で経験したことのない新しいものであると痛感した。

このような独立した存在であることが求められるときに、孤独感や孤立感に苛まれるものなのかどうかと問われたら、否と答える。それは、単一の質の高い国際的な会計基準を開発するという目的に対する日本をはじめとする多くの国や地域の関係者の意識の高さと力強い支援、そして、この活動に関わる IASB の理事並びにスタッフのプロジェクトをやり遂げていくことへの熱意のあるコミットメントといった目に見えない多くのものに支えられて、私の理事としての日々の活動があるからだ。

### これからの IFRS に求められること

最初にご紹介した絵画を描いた時の画家ゴーギャンは失意の底にあったため、作品名も絵画も先行きや展望は決して明るくなく、私の船出にふさわしくないようにも思える。しかしながら、この作品のきっかけになった画家が反発したキリスト教の教義は、「人間はどこからきたのか、どこへ行こうとするのか、どうやって進歩するのか」であったと聴いている。すなわち、画家が反発した教義には含まれていた「どうやって進歩するのか」を、私がこの絵画のメッセージとして受け止めていることから、繰り返し頭に浮かんで問いかけてきているのだと気づいた。

現在、IFRS は、2018 年 4 月 25 日現在 IFRS 財団が確認している 166 のうち 144 の国または地域で使用が義務付けられ (<https://www.ifrs.org/use-around-the-world/use-of-ifrs-standards-by-jurisdiction/#analysis>)、真の国際的な会計基準となっている。このような位置付けの会計基準であることは、全ての関係者の方々のこれまでの支援と協力の賜物である。

しかしながら、IFRS も他の会計基準と同じであり、財務報告を作成するために利用される会計のルールである。つまり、IASB での開発が終了し公表された後は、実務で利用されるために存在し、利用されなければ存在意義が喪失するルールである。そのような会計基準の一つである以上、企業活動や取引だけではなくそれを取り巻く環境が変化するときには、その変化に応じられるのかどうかを検討され、必要な対応がなされていくことが求められる。したがって、IFRS が今置かれている状態で立ち止まり、新たな企業活動や取引、企業環境などに応じられなくなれば、いつでも会計基準として利用されなくなり、その代替として新しい会計基準が利用されるおそれは否定できない。

更に、これまで IFRS の開発段階では、想定し得なかった業種や取引、テクノロジーを利用した財務情報の利用、広範囲にわたる関係者の理解や考えの多様化等の織り込まれていない問題も日々出現している。国際的にも経済活動の変化も急速で、影響も複雑であり、将来予測が困難で不透明な要素が高まり、企業や市場の在り方も根幹から大きく揺さぶられている。IFRS も、普遍的で基盤となる変えてはならない軸と、将来を長期的に見据えながら変えていくべき部分とをしっかりと見極めて開発されなければならない。これからもより多くの国や地域の企業の利用に耐えうる質の高い会計基準であり続けるために、進化を遂げていく必要がある。

IFRS が急速な変化が継続する時代のニーズに応えその良さを失うことがないように、私自身も、多くの関係者からのインプットに耳を傾け理解しながら、ぶれることない軸を持って IASB での審議に参加し、幅広く多様な活動に従事したい。そして、これからも成長し進化できるように、日々精進していきたい。

# 世界を変える ASBJ マジック

(前) IASB 理事  
おうち たかつぐ  
鶯地 隆継



子供のころから手品を見るのが好きだった。何もない1枚のハンカチから鳩が飛び出したりするのを見て、子供心にすごく驚いたものだ。国際会計基準審議会 (IASB) 理事に就任して以来8年間、そんなマジックを毎月企業会計基準委員会 (ASBJ) のスタッフから見せられた。

IASB 会議の資料は膨大である。特に就任当時は米国財務会計基準審議会 (FASB) とのジョイントプロジェクトが多かったので、総ページ数が1,000ページ近くになることもあった。もちろん全て英語である。今では資料は必ず2週間前に出てくるが、当時は資料が出てくるのが会議の1週間前。7日間は168時間、すなわち10,080分である。1,000ページを1週間以内に読むとなると単純計算で、1ページ10分のペースで、24時間ぶっとおして読んでようやく間に合う。当然多少の睡眠も食事も移動時間も必要なので、そんなゆっくりのペースで読んでいては間に合わない。もちろん読むだけではなく、十分に理解し、自分の考えを整理し、発言の準備をしなくてはならない。資料は時に非常に難解なこともある。また、過去の議論の経緯を知らなければ、いくら丁寧に読んでも意味がよく分からないものもある。大変な仕事を引き受けてしまったと思った。

しかし、ASBJ が総力をあげて私をサポートしてくれた。スタッフで手分けをしてテーマ毎に資料を読み解き、日本語の要約や、過去の議論の経緯説明を準備してくれた。時にはオリジナルの英語の資料にはない図表やチャートまで用意して、議論のポイントを教えてくれた。そのスピードと精度がマジックとしか言いようがなかった。私が英語の資料を読み始める前に、もう日本語の丁寧な解説が出来上がっていた。本当は ASBJ が先に日本語で資料を作っていて、IASB がそれを英語に翻訳していたのではないかと思われるくらいタイミングが早かった。このような超人的な ASBJ のサポートがなければ、私は自信を持って議論に参加することは出来なかった。担当されていたスタッフの方々は、徹夜に近い作業もされていたのではないかと容易に想像できる。

しかも ASBJ の素晴らしかったのは、それだけのサポートをしながらも、私が IASB 理事として発言をすることについて、一切の干渉をしなかったことである。IASB 理事は国の利益代表ではなく、あくまで個人の見識に基づいて発言することが求められる。従い、私は ASBJ での議論も参考にしつつ、自分自身の意見形成をして IASB で議論をしてきた。時に、ASBJ の意見と全く異なる意見発信をすることもあった。

一方で、ASBJは私が調査をお願いしたことについては、非常に迅速に対応してくれた。例えば、金融商品会計や料金規制事業会計など特定の産業分野に影響があると考えられる提案事項について、私がお願いすれば、すぐに関連する業界団体などからの反応を調査してくれた。ASBJは日本のほぼ全ての産業セクターの業界の関係者とのチャンネルがあり、それぞれの分野のキーパーソンのご意見をボード会議が始まる前に、事前に確認することが出来た。その点では、私は他のIASB理事よりもはるかに恵まれていたと思っている。おかげで、会計士でもなく、会計の学識者でもない私が何とか8年間IASB理事という重責を全うすることが出来た。いくら感謝をしても仕切れないほど感謝しており、誌面を借りてお礼を申し上げたい。

ところで、IASBの使命は国際的に利用可能な単一の1組の会計基準を作成することであるが、おのずとそれは英語にならざるを得ない。すると論理構築も英語を前提とした組み立てになり、日本語に置き換えると理解不能なものになることもある。一方で、日本にはしっかりとした法体系に基づく日本語の専門用語があり、日本の社会制度の中での厳格な定義と運用体系がある。そこに英語から単純翻訳した言葉を当てはめても、全くしっくりこないことが多い。おそらく、それは言葉だけの問題ではなく、多くの学者が指摘されているように会計とその他の社会制度との整合性や枠組みそのものの問題なのかもしれない。しかし、世界中でこれだけIFRSが適用されているとなれば、それは何としても乗り越えなくてはならない。ただし、それは日本が一方的に国際標準に合わせなくてはならないということではない。

日本は経済大国である。世界第2位の地位からは陥落して久しくとも、自由主義圏の中では依然として大きな存在感のある経済単位であ

り、独自の伝統と文化に支えられた経済システムを持っている。その経済システムが無視された状態で国際的な会計基準を作っても、それは欠陥商品である。そのような欠陥商品を作らせないようにするのが、IASB理事の役割であり、そのためにASBJの協力もいただけた。

私が理事になってからも、多くのASBJスタッフがIASBに出向し、実際に基準設定に直接関与している。また、ASBJは様々な国際会計人材育成のための教育プログラムを策定して、次の世代への準備もしている。国際基準策定に関与するためには、このような地道で息の長い努力が重要である。それは目立たない努力であるが、着実に成果を生む努力でもある。

例えば、概念フレームワークでも当期純利益の重要性が再確認され、現在IASBが取り組んでいる基本財務諸表プロジェクトにおいては、営業利益がIFRSの定める勘定科目となる。また、日本の経常利益に近い概念も提案される。そして、日本の市場関係者の関心の高いのれん代の会計処理について、6月のボード会議では、IASBがのれん償却を復活させるという提案をするかどうかが議題となった。8対6で否決されたものの、これまではほとんど無視されてきていた議論であったことを考えると、状況は大きく変化してきている。加えて言えば、6月の投票結果は8対6ではあったが、減損処理のみの現在の会計処理で問題ないという見解を支持した理事は5名のみであり、残り9名は減損処理のみの現在の会計処理には問題ありという認識であった。ただ、9名のうち3名は償却と減損のみの両論併記をすべきという意見であったが、5年も議論をした上での両論併記はあり得ないということから、最終的な投票結果が8対6となったのである。

このように日本の意見は、着実にIASBの議論に反映されてきている。もちろん、その背景

には日本における任意適用の拡大という大きな動きがあるが、上述したような ASBJ をはじめとする日本の関係者の方々の継続的で地道な努力が着実に実ってきていると考える。世界を変えるマジックとは地道な活動なのである。

会計基準に限らず、日本が国際標準に参画し、そこに意味のある影響を成すことは並大抵のことではない。本稿では ASBJ の活動を中心に述べたが、もちろん他にも、金融庁、経団連、ユーザの方々、監査人の方々をはじめ非常に多くの市場関係者からも同様に大変強力なサポートをいただき、それに支えられてここまでやってくることが出来た。改めてここに深い感謝を申し上げ、筆を置きたい。